

社会福祉学における「利用者本位」の研究のあり方に関する一考察**—社会福祉学方法論再考の立場から—**

○ 東北福祉大学大学院研究生 佐々木剛生 (007307)

田中 治和 (東北福祉大学・0116)

キーワード3つ：社会福祉学研究方法論, 利用者本位, 当事者研究

1. 研究目的

本研究の目的は、社会福祉学方法論を再考しつつ、「利用者本位」な研究のあり方を考察することである。

2. 研究の視点および方法

日本社会福祉学会の機関誌『社会福祉学』の創刊号の共通論題は「社会福祉と諸科学」であり、同号には共通論題を含めて方法論に関する論文が4本掲載されているが（岡村(1960), 嶋田(1960), 牛窪(1960), 西原・岩本(1960)), ここからは社会福祉学の独自性・固有性を考えるにあたり先学が研究方法論を如何に重視していたかが伺える。こうした先学の問題関心の意義は大変大きいと考えられるものの、その指摘を十分に継承できていない部分が残されていると考えられる。

周知の通り、介護保険制度創設を見据えた1995年前後から「利用者本位」という用語（高齢者介護・自立支援システム研究会(1994), 老人保健福祉審議会(1995), 社会保障制度審議会(社会保障制度体制の再構築(勧告)(1995))が用いられるようになった。その結果、社会福祉実践においては「利用者本位」が基本的かつ必須の観点となっている。翻って、社会福祉学研究のあり方と「利用者本位」の関わりを考察した先行研究は極めて少ない。

さらに、近年の障害学や女性学等を管見すれば、当事者本位の研究の方法論的困難さについては提示されている。従って、本稿では以上の諸点を踏まえて先行研究を検討し、社会福祉学研究方法論として「利用者本位」な研究のあり方の考察を試みる。

3. 倫理的配慮

発表は文献研究であり、日本社会福祉学会研究倫理規定、特に引用に関する事柄を遵守している。また、本発表は共同研究者から発表について承諾済である。本発表に関連して、開示すべき利益相反はない。

4. 研究結果

社会福祉学の先学は社会福祉学の固有性と独自性の基盤を研究方法論に求めようとしていた。「単なる実践的成果の積みかさねだけでは不充分であって、これを独自固有の範疇によって新しい社会福祉的概念を構成する鋭い洞察力を要求せられる（岡村 1960, p.7)」、
「いいかえるとこのことは、この特殊な活動領域にふさわしい特殊な方法を編み出す創造的努力に欠け、またこれに応じて、社会事業に固有な独自の理論的着想や展開がなかった

ということである。このことが社会事業研究にとっての一番重要な問題なのである（西原・岩本 1960, p.53）。

「経験相互間をつなぐということは、何らかの理論あるいは亜理論がなければ不可能」（桑原 2011：179）とされているように理論は実践に先行するが、社会福祉学の先学はこの（実践に先行する）理論形成のあり方に社会福祉学の固有性と独自性の基盤を見出していたと考えられる。「社会福祉の理論形成の基盤は、第一義的には、社会福祉実践そのものしかなく、そこから研究者が、いかに抽象化することができるか、否かが、理論形成の要となろう（田中 1993, p.109）」と論じているように、社会福祉学独自の理論形成の重要性は今一度反省されてよいと考える。

5. 考察

社会福祉実践および社会福祉学研究において理論形成が不可欠ではあるのだが、理論形成は抽象を伴う。抽象とは特定の側面・性質を排除しつつ、何らかの側面・性質を選択することであるから、研究という行為は、研究者によって対象から何かを排除する営みでもある。その排除されるもののなかに研究対象の当事者性が含まれない保証はない。このことは、研究者が倫理上誠実であろうと努めるか否かに関わらず不可避に生じる、研究という行為が抽象を伴うことからくる方法論上の制約といえるのではなかろうか。

宮地（2018）は、トラウマ研究の立場から、過酷な経験をした他者を理解しようとすることについて「近寄れないもの、理解できないものがあるということを知っておくことには、はかりしれない価値がある（宮地 2018 p.9）」と述べているが、上述した研究方法論上の制約を踏まえれば、研究対象の当事者性を捉え切れない可能性をも出発点とし、捉え切れていないであろう当事者性を探求することこそが「利用者本位」な研究のあり方ではないかと考える。以上を踏まえつつ、社会福祉実践の在り方を問う社会福祉学研究においては研究方法論を不断に問い続ける必要がある（当日配布するレジюмеを用いて詳細に論じる）。

主要参考文献（より詳細な文献リストは当日配布します）

- 岡村重夫(1960)「社会福祉と諸科学 社会福祉研究方法論(1)(社会福祉と諸科学,共通論題)」,
西原熙久・岩本正次(1960)「社会事業研究の問題と方法に関する一考察(自由論題)」『社会福祉学』1.
田中治和（1993）「社会福祉の理論形成についての覚書」『東北福祉大学研究紀要』18, 103-110.
内藤和美・辻智子（2001）「フェミニストであることと研究者であること—個人史を題材に」『女性学』8(0), 103-115.
桑原武夫（2011）「研究者と実践者」『ちくま哲学の森2 世界を見る』筑摩書房
星加良司・堀正嗣・熊谷晋一郎（2013）（特集 特別セッション 「当事者学」に未来はあるか—障害学会創立 10 周年に寄せて—）『障害学研究』10,50-83.
宮地尚子（2018）『環状等＝トラウマの地政学』みすず書房 新装版